

人間福祉学部研究会

2018 年度は、次のとおり研究会と行事を開催した。

■研究会

第 1 回 2018 年 6 月 20 日 (水)

- ・テーマ 生成文法理論に基づく英語の限定システムの発達

発表者 茨木正志郎 人間福祉学部准教授

第 2 回 2018 年 10 月 24 日 (水)

- ・テーマ 介護人材の育成・確保とサステナビリティ～ケアワーカーの職務意識研究から考える～

発表者 澤田有希子 人間福祉学部准教授

- ・テーマ スポーツ心理学「メンタルトレーニングへの誤解」－アスリートの声と研究現場から－

発表者 笹場育子 人間福祉学部専任講師

各教員の発表内容は次のとおりである。

生成文法理論に基づく英語の 限定システムの発達

茨木正志郎

本発表では、発表者の研究分野・研究手法についてまず紹介し、具体的な研究事例として二重限定と呼ばれる現代以前の英語に観察された構文の消失について紹介した。発表者は生成文法という言語理論に基づき、言語、特に英語における種々の言語変化について、文法化 (grammaticalization) の観点からアプローチを試みている。生成文法とは、1950 年代半ばにアメリカの言語学者チョムスキーによって提唱された理論で、人間は生得的に言語に関する知識を備えているという仮説に基づき、適格文のみを生成するという人間の言語能力を規則の体系として記述することを目指す文法をいう。また、文法化とは内容語が機能語に変化することをいい、例えば、現代英語の will は、古英語では動詞であったが、次第に未来を表

す助動詞となった。データ収集に使われる史的コーパスには、古英語の York-Toronto-Helsinki Corpus of Old English Prose (YCOE) と中英語の Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)、初期近代英語の Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)、後期近代英語の Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE) などがある。これらのコーパスでは、各時代の自然言語の文章が収集されているだけではなく、文や句に言語的な情報 (品詞や統語構造など) が付与されている。これらのコーパスは Corpus Search 2 などのツールを用いて、特定の構文について検索したり解析したりすることができる。

本発表の後半では、具体的な研究事例として、英語における二重限定 (例: the their holy bishop) の消失について、所有代名詞の文法化の観点からの分析を紹介した。まず、史的コーパスから収集した二重限定に関するデータとその分析を示した。そして、これらのデータに対して、生成文法に基づく文法化理論の代表格である Gelderen (2004) を用いて説明を与えた。具体的には、古英語で二重限定が許されていたのは、所有代名詞が形容詞に近い振る舞いをしており、D 主要部より低い位置に生起していたため、指示詞と所有代名詞が共起する語順が許されていた。しかし、所有代名詞が、次第に文法化され D 主要部としての地位を獲得することにより、指示詞と同じ統語位置を競合することになったため、二重限定は後期近代英語までに消失した。

介護人材の育成・確保と サステナビリティ ～ケアワーカーの 職務意識研究から考える～

澤田有希子

本発表では、介護人材を巡る現在の日本社会の状況、これまで筆者が取り組んできた介護労働者の職務意識研究の内容と成果、外国人介護労働者の受け入れと今後の研究課題、の3点について報告した。

高齢者介護の担い手である介護労働者の人材不足は、今や日本社会において、家族問題を越えた社会問題であり、政治問題、経済問題である。

介護労働者の職務意識研究においては、介護職のストレスやその結果として引き起こされる離職行動やバーンアウト症候群に注目し、その構造を解明し、バーンアウトの予防につなげることを目指してきた。バーンアウト研究においては、バーンアウトの関連要因を究明する対処行動の研究が行われており、個人特性や個人行動、組織システム、ネットワークなどが注目されてきた。

筆者は対処行動として組織要因を重視し、職場内のソーシャルサポートやキャリア意識を含む分散構造分析のモデルを作成し、女性には上司からのソーシャルサポートが得られること、男性にはキャリア意識やキャリア期待が高いことがバーンアウトを低減する効果を示すことを明らかにした。また、介護労働者のストレス尺度として、仕事の負荷、報酬評価、職場における人間関係、利用者や利用者家族との人間関係、役割ストレスなどの概念を含むバーンアウトストレスモデルを作成し、報酬と専門性評価の重要性を示した。

近年の政府による介護人材確保対策の取り組みは、報酬を中心とした処遇改善、資格取得などのキャリアアップ研修やメンター制度の導入など、職場組織の環境改善に焦点を当てており、一定の効果が期待される。その一方で、2017年には介護人材不足の深刻化を背景に、外国人労働者の受

け入れを想定した入管法や技能実習法が改正された。介護報酬や専門性評価の向上に逆行しかねない取り組みは、介護労働者の職務意識に大きな影響を与える可能性がある。十分な議論や準備もなく始まった外国人介護士の受け入れをどのように進めていくか、政策レベルだけでなく、職場組織レベル、個人レベルで対応を検討することが急がれる。

今後は、加速度的な人材受け入れの増加によって引き起こされる組織環境の変化に注目し、新たな介護人材とされる外国人介護職員のストレスの検討、ソーシャルサポートの必要性、キャリア形成支援のあり方について探っていくことが喫緊の課題である。第一線でケアを担う介護労働者の支援に結びつくための職務意識研究を今後も継続していきたい。

スポーツ心理学

「メンタルトレーニングへの誤解」 ーアスリートの声と研究現場からー

笹場 育子

本発表では、筆者の10年以上に及ぶ競技現場でのアスリートに対する心理的介入記録から、一般的に未だ多くの誤解を受ける「メンタルトレーニング」について、研究事例の紹介を行った。

オリンピックアスリートやプロアスリートなど特に競技力の高いアスリートの課題には二つの側面が存在する。

まず一つ目は「競技力向上に関する競技場面での様々な課題」であり、例えば結果が求められる高プレッシャー下において、いかにいつも通りの実力を発揮するかというところに課題の焦点が当てられる。この、競技場面で起こる様々な心理的現象に対しては、効果を可視化し科学的に根拠を説明することが可能な「定量的研究アプローチ」が有効である。代表的なものの一つとして、バイオフィードバック（BF）が広く活用されており、一例を挙げると過緊張によって本来の力が発揮できないアスリートのリラックス状態や集中状態を

可視化し、自己コントロール能力を高める手段として効果があると示されている。客観的に数値化しにくい「心理」という分野の特性上、何をもってトレーニング効果とするのかがこれまで課題であり、認知や言動行動変容など定性的側面からの評価に加え、BFによって裏付けられた生理指標など定量的側面からの評価が重要となる。

課題の二つ目の側面として、メディアに登場するエリートアスリートの輝かしい姿からは想像しにくく、一般的に広く知られていないが「実力発揮に必要な安定した土台に関する様々な課題」が挙げられる。人生を競技に捧げるエリートアスリートは常に想像を超える苦しみや痛み、プレッシャーと背中合わせであり、競技場面で一瞬の輝きを支える、人としての土台を安定させることが非常に重要となってくる。この、競技場面を取り巻く様々な心理的現象に対しては、数値化できないからこそその何層にも重なる言葉の重要性を根拠として説明することが可能な「定性的研究アプローチ」が有効である。エリートアスリート特有の課題である競技生活引退後のキャリアトランジションに関する事例の紹介では、研究結果からセカンドキャリアへのスムーズな移行の促進に繋がる「デュアルキャリア教育」の必要性が示唆された。

■諸行事

- アンチ・スティグマ活動「ツレがうつになりました。」上映会
日時：2018年3月3日（土）13:00～17:00
場所：G号館 202教室、203教室
- 講演とワークショップ「財政破綻のまち、夕張市の再生への希望」
日時：2018年10月8日（月）11:10～15:00
場所：G号館 111教室
- 講演会「英国・レスターにおける緊縮財政の統治」
日時：2018年10月24日（水）13:30～15:00
場所：G号館 101教室
- 講演会「ソーシャルワークにおけるメゾ領域

の变革を検討する」

日時：2018年11月29日（木）11:10～12:40

場所：G号館 201教室

各行事の概要は次のとおりである。

●アンチ・スティグマ活動

「ツレがうつになりました。」上映会 報告

1. はじめに

2018年3月3日（土）に、関西学院大学上ヶ原キャンパス G号館において「ツレがうつになりました。」上映会（13:00～15:10）、及び茶話会（15:25～17:00）が開催された（主催：関西学院大学人間福祉学部研究会）。以下に、映画上映会および茶話会の概要および、その参加者を対象に参加前後に行ったアンケート調査の集計・分析結果について報告する。

上記イベントは、2017年度の精神保健福祉援助実習履修生（以下、実習生）を中心に企画立案・準備・実施運営されたものであり、学生主体の取り組みになっている点が特徴である。これまで、人間福祉学部研究会主催により行われた精神障害に対するアンチ・スティグマ活動は、1回目が2011年度、2～4回目は2014年度から2016年度にそれぞれ連続して開催されてきた。今回が5回目と言うことになるが、いずれも当該年度の精神保健福祉援助実習履修生の主導により企画を実施してきた点では一貫している。

今年度の参加者数は、映画上映会・茶話会ともに、学生・院生7名、卒業生8名、手話通訳者2名、教職員3名の、計20名であった。

なお、この報告は、実習生が下書きした原稿を、精神保健福祉実習担当教員（松岡）が修正加筆したものである。その際には、極力、下原稿の文章を活かすことに留意した。したがって、以下においては記述の視点が実習生のそれになっていることをお断りしておきたい。

2. 映画上映会の概要

(1) 映画上映会の実施に至るまで

精神障害は、その障害（インペアメント）が見えにくいものとされている。それ特有の表れがあ

ることもあって、社会にはまだまだ精神障害に対するマイナスイメージがあり、一般に広く理解はされていない。今日においてすら世間の偏見や誤解などが根深く残っており、その是正のためには、地道なアンチ・スティグマ活動の展開が欠かせないであろう。

その中でもうつ病は、現在 100 人中 10 人から 15 人が一生のうちに一度は罹患すると言われており、人間関係などのストレスとも密接に関連していることもあって、現代社会の中では誰にでもなり得る疾患の一つとされている。さらに、うつ病は統合失調症などの他の精神疾患と比べると、その症状や症例がまだ一般的に知られている方で、その意味では非常に身近な病気であるのかもしれない。

しかし、こうしら身近さはあるにしても、病気やそのインペアメントについての正しい知識や理解が社会全体に広まっているとはいえず、患者やその家族の置かれている状況に対して誤解が生じていることも少なくない。そのため、周囲から「怠病」と捉えられてしまい、あるいは、本人もそのように認知してしまうことで無理を重ねてしまい、重大な悲劇を招くケースも後を絶たない。うつ病は自死（自殺）などとも関連性が大きく、再発率も高い。それゆえに適切な治療と支援・周囲の関わりが必須になってくるのだが、そのことが社会にきちんと理解されていない現状があることは否定できない。

こうした問題意識から、広く社会に対してうつ病に対する正しい知識や理解を広めることを、今回の企画の目指すところとした。

今回は、漫画やテレビ番組でも知られるようになった「ツレがうつになりまして。」を取り上げるようになった。これまで本研究会は 4 回にわたり精神障害に対するアンチ・スティグマ活動のうちで 3 回を映画上映会の形でそれを実施してきたのだが、内 2 回は統合失調症、1 回は強迫性障害を取り上げた作品を選んでおり、うつ病を取り上げた映画は今回が初めてになる。

(2) 本作品採用の経緯

今年度の実習生が、本企画の検討作業に着手したのは 2017 年 5 月頃になる。上記の通り、これ

までのアンチ・スティグマ活動は第 1 回目から第 3 回目までが映画を上映するという方法がとられていたのだが、アンチ・スティグマ活動として第 4 回目となる昨年度は、精神障害の当事者を「本」に、参加者を「読者」に見立てて、対話式の貸し出しを行う「ヒューマンライブラリー」を実施した。「ヒューマンライブラリー」参加者の企画に対する評判が良かったことから、当初は今年度も映画上映以外の形で企画を行うことを検討してみた。しかし、その場合はどうしても準備が大変であること、実習生が昨年と比較して少人数であることから、今年度は比較的实施が容易である映画上映の形を取った次第である。

映画上映の実施を決定してからは、次に上映する作品の検討を始めることになった。精神疾患が取り上げられている作品のなかから任意で 10 作品を候補として選び、実習生全員で分担して全てを鑑賞したのち、今回上映する作品の選定作業を行った。

アンチ・スティグマを目的とした上映会であるのだが、暗い作風よりも希望を見いだせる内容である作品を優先し、あるいは精神障害のネガティブ面のみが強調される作品は選択肢から外すことにした。また、過去に実施した映画上映会と同じく、上映後に茶話会を開催することとし、その場では映画を見た参加者間の交流と意見交換をしてもらうことになった。そのために、茶話会参加者が意見を述べやすいかどうか意識しながら、上映する作品を選定した。

選考の結果、最終候補として残ったのは今回の上映作品である「ツレがうつになりまして。」と、統合失調症患者を描いた「ビューティフルマインド」の 2 作品である。これまでは統合失調症と強迫性障害をテーマに映画上映会が行われてきたが、うつ病をテーマとした映画は取り上げられていなかった。そこで、現代社会において誰にでもなり得る精神疾患の一つである「うつ病」をテーマとした「ツレがうつになりまして。」(2011 年、佐々部清監督)を上映することとした(「ツレがうつになりまして。」製作委員会、配給は東映)。本作品を選んだその他の理由としては、うつ病の症状や接し方がわかりやすく描かれていること、著名な俳優が数多く出演しており集客率が見込め

ることなどが挙げられる。

また、今回最終候補として残った 2 作品は、いずれともに上映会を開催する上で著作権の問題が生じていた。そこで「ツレがうつになりました。」に関して配給会社に相談したところ、その理解を得ることが出来、学内での宣伝に留めることを条件に上映会開催の許可を頂戴することができたのは幸いだったと考える。

なお、参考までに、今回検討した 10 作品を以下の通り挙げてみる。

- ・ツレがうつになりました。
- ・ビューティフルマインド
- ・アントキノイノチ
- ・ドリームチーム
- ・世界にひとつのプレイバック
- ・ふるさとをください
- ・シャイン
- ・阿弥陀堂だより
- ・17 歳のカルテ
- ・マイク・ミルズのうつの話

(3) 映画「ツレがうつになりました。」のあらすじとその分析

「ツレがうつになりました。」では、堺雅人演じる几帳面な性格の夫 高橋幹男・通称「ツレ」と、宮崎あおい演じる売れない漫画家で妻の高橋晴子・通称「ハル」という二人の主人公を軸にストーリーが展開される。

ある朝、ツレはいつものようにお弁当を作ろうとするが、どういうわけか作れない。そこからツレの身体に異変が起こり始める。ハルは、「風邪じゃない？」とツレの様子を深く気に留めないものの、病院へ行くことをすすめる。そして病院で告げられた病名は、激務とストレスを原因とする「うつ病」だった。この映画では、近年世に広まりつつある「うつ病」を題材としているのだが、劇中では、その身近さや誰にでも起こりうる病であるという点を「心の風邪」という言葉によって表現しており、「うつ病」という病が明るく温かいタッチで描かれている。

そこには、うつ病について身近に感じてもらいたいという思いが込められているようで、私たちがこの映画を選んだ理由にもつながる。しかし後

述するが、映画上映会後の茶話会において、ツレが休養のために仕事をやめる場面を見て、ツレとハルの経済面での苦労についての言及があったように、この映画の中では描ききれない、うつ病の負の部分も残されている点を見落としてはならないだろう。そのことが、今回の参加者にどのように伝わるかということが重要なポイントであったと考える。

劇中でツレは、病院で処方された薬を飲みながら仕事を続けていたがよくなりず、ツレを心配したハルは「会社やめたら？」とツレに伝える。ツレは最初それを拒んだが、今度はハルが「会社やめないなら離婚する」と強く迫る。うつ病では、発病の引き金になったと考えられるものを取り除き、十分な休養をとることが大切であるといわれている。とはいえ、このときの突き放すようでありながら、ツレのことを一番に思うハルの言動は、誰もがそう簡単に真似できるものではないだろう。その後も紆余曲折はあったが、結果的にこの「無理強い」によってツレはストレス源から離れ、休養を取ることができるようになった。

ツレは上司にうつ病であることを告げ、アルバイトとしての勤務を希望するも受け入れてもらえず、退職願を出す。しかし、すぐには辞められず、結局 1 ヶ月会社に通うこととなる。繰り返すが、うつ病は私たちにとってより身近な病気になっている一方で、他の精神疾患と比較して、少し軽いものに聞こえてしまうという面があるように思う。つまり、「うつ病」という名前だけが一人歩きしている現状を無視できない。そのことが、こうした映画の場面を通して、伝えられようとしているのではないだろうかと考えたい。

この映画のキャッチコピーは「頑張らないぞ」「健やかなるときも病めるときも君と一緒にいたい」というものであり、これらの言葉は、ハルのツレに寄り添う姿そのものを表現しているといえる。「世間様に申し訳ない」とうつ病になった自分を責めるツレに、ハルは「頑張らない」ようアドバイスする。ツレは頑張ってしまう性格であり、「頑張らない」ことはツレにはなかなか難しいことである。そんなツレの性格がうつ病という病を引き起こすことになった要因の一つなのかもしれない。うつ病に理解のないツレの兄からは、

「頑張れ」「みんな頑張っているぞ」と、ツレを追い込むような言葉がかけられる。その場面を見ている人は、誰もが思ったことだろう。ツレはうつ病であるそのとき、決して頑張っていないわけではないのである。頑張らないことが難しい人にとって、頑張れという励ましの言葉が時に禁物であるということも、こうしたエピソードに沿う形で発信されている。

ツレがうつ病だと聞いてから自分の日記を見直したハルは、自分が記していたツレの様子から実は少し前からすでに症状が始まっていたことに気付く、ツレの変化を見落としていたことを謝る。また、締め切りが迫ったハルがツレに冷たく当たり、突き放したところ、ツレが浴室で自殺を図ろうとしてしまうという場面がある。ハルは、それを止めては詫び、ふたりは風呂場で号泣する。このとき、恐らく観る者は、ツレとハルが二人だけで取り残されてしまったような印象を受けることだろう。ツレもハルも実は孤立し、孤独だったのかもしれない。

私たちは、長い時間をともに過ごす家族であるからこそ、受け入れられないことや、見落としてしまうことがあるのかもしれないことに気づくべきであろう。しかし、小さな変化に気付き寄り添うことができるのも、また家族なのである。そのことをハルの姿から教えてもらえたように思う。

以上、主に実習生という立場からストーリーをまとめてみた。映画上映会に参加した他の学生のコメントには、ハルと同じように家族という立場からただ寄り添うという、シンプルでありながら最も難しいことが果たして自分にもできるのかという疑問を覚えたことが記されていた。「寄り添う」ということは、言葉にすれば簡単だが実行することはなかなか難しいことであろう。その意味では、理想ではあるが現実には難しいという思いを学生たちは抱いたのかも知れない。

ところで、PSW として働く卒業生からは、専門職はハルのような家族の代わりとなれているのだろうか、専門職としての視点から映画を眺めていたようなコメントがあった。劇中では、ツレがハルや家族とのかかわりによって支えられていることが伝わってくるのだが、一方で、ツレに関わる医師以外の専門職については描かれている場

面はない。

学生、専門職など見る立場によって、注目すべき点も異なってくる。学生である私たちだけでは気付くことのなかった多様な視点から、映画について思いをめぐらせることができた貴重な時間にもなったと考える。

3. 茶話会の概要

(1) テーマと流れ

まず、3つのグループに分かれて、そこで各々自己紹介をしてもらった。その際に、名前、所属に加え、自分の好きなものを任意で2つ取り上げて発表してもらうことによって、初対面の人が多い中で、少しでも参加者同士の距離が縮まるように試みた。

続いて、「この映画を通して気づいたこと、感じたこと」をテーマとして、映画を見て感じた思いをグループ内で共有するワークを行った。このワークではポストイット（付箋）を使用し、まずそれぞれに映画における気付きや思いを付箋に記入しもらった。付箋に記入してもらう気づきや思いとは、必ずしも映画内容に関することに限定せず、うつ病の生きづらさや、自身の経験と結びついた点なども書いてもらった。次に、グループ内で、付箋に書いた気づきや思いを、それぞれ順に開示することで共有してみた。その後、開示した付箋の集まりを、グループの全員で、模造紙の上を使って分類し、グループ内でまとめる作業を行ってもらった。分類の具体的な手順は、①付箋の内容によってカテゴリー分けをする、②カテゴリーの名前を付ける、③カテゴリー同士を線で結んで関連付けると、いう KJ 法の手法に則した。

カテゴリーを抽出し、まとめる作業を終えた後、作業も用いた模造紙を使って全体の前でグループ発表を行い、他のグループとも共有した。それによって、自分のグループでは出なかった意見も吸収し、新たな発見や気付きを生むことができたように思う。

(2) ポストイットを使用したワークの分析

上述したように、映画上映会後の茶話会では、3グループに分かれて「この映画を通して気付いたこと・感じたこと」というテーマで、ポストイ

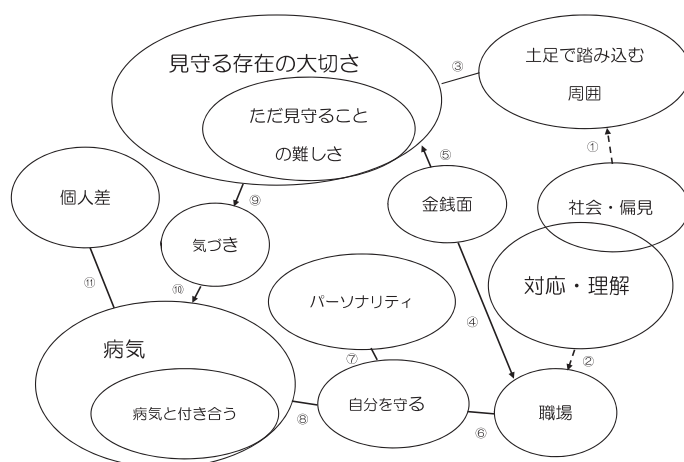


図1. ポスイットを使った分析結果

ットに記入、それらを分類、発表してもらった。ワーク終了後、実習生が3グループの内容を、KJ法の手法を用いて整理分類し、全体の傾向を分析した。ここではその結果を紹介する。その詳細な内容が図1のとおりである。以下は、図1における矢印の番号について説明したものである。

- ① ツレのうつ病を知って、「頑張れ」「みんな頑張っているぞ」というツレに対する親族の言葉には「うつ病は気の持ちようである」「うつ病＝恥ずかしい」という社会の間違った理解、偏見が影響していると考えられる。うつ病を理解している人としていない人の間で対応の違いがあり、職場、家族での病気に対する正しい理解が求められる。
- ② ツレが、会社をなかなか辞職できなかった場面には、うつ病という名前が社会に浸透しつつあるにもかかわらず、実際にはこの病気に対する理解が追いついていないという現状が表れている。
- ③ つ病とうまく付き合っていくには、周囲のサポートが不可欠である。うつ病に対する周囲の間違った理解や偏見に対して、どんなときもありのままを受け止め、隣にいてくれる家族の存在が大切である。しかし、「見守る」ことには家族という身近な立場であるからこそ、逆にそこから生じる難しさがあることも忘れてはならない。
- ④ 病気に対する職場の理解を得る難しさから、

カミングアウトすることにも多大な勇気が必要になってくる。また、離職によって経済面での苦労が発生することが考えられるだけに、カミングアウトのために乗り越えなければならない心理的壁は一層高くなる。

- ⑤ 療養のために辞職することには経済的にも大きな心配があるにもかかわらず、家族であるハルがツレのことを思い、むしろ支えてとして家族の役割を果たそうと考えていることは、ハルがツレに仕事をやめるようにと説得する場面によく表れている。
- ⑥ 劇中でツレは、自らを守るために仕事をやめることを選んだのではないか。
- ⑦ 「うつ病になんかなってごめんね」というツレの言葉に表れているように、うつ病になる人にはツレのようにまじめで自分を守ることが苦手な人が多いと考えられる。
- ⑧ うつ病になる人は頑張らないことが苦手なのかもしれない。予防のためにも、うつ病とうまく付き合っていくためにも、自分を守ることが大切である。
- ⑨ ツレの小さな変化にハルが気付くことから、ツレの治療が始まることになる。
- ⑩ うつ病は誰でもかかる病気で、他人事ではないという理解はあるものの、うつ病の始まりは周囲から気づかれにくく、「だるい」「しんどい」から始まることもあり、発病が見落とされてしまう危険性がある。また、うつ病は治りかけが一番怖いということ、良いときと

悪いときの波が激しいということが言われており、絶えず相手の変化に「気付く」ことが求められる。

- ⑪ 劇中で描かれるツレの姿が、うつ病のすべてを代表していると一般化されて受け止められてしまう危険がある。うつ病の症状は人によって異なり、決してワンパターンではない。今回の病気の描き方が映画を見る人に与える影響について考える必要がある。

また、ポストイットに記載された意見について、それぞれカテゴリー化したものを、以下に記載する。

- 見守る存在の大切さ
どんなときもあるのまますを受け止め、隣にいてくれる人の大切さ・同じ時間、場所を共有している人を大切に・周囲のサポートが必要・一緒に暗くならない
- ただ見守ることの難しさ
妻という身近な立場から見守ることの難しさ・周りのイライラしてしまう気持ち・どうしても出来ないことに目がいく・うつ病は周りの人にとっても大変なこと
- 金銭面
金銭面も大変
- 社会・偏見
「うつ病＝恥ずかしい」という認識・実際にうつ病の人に会うと声を掛けづらい・勇気を出して声をあげてみる・理解者もいる・専門職は劇中でいう妻の代わりになれているか・国や市はどのような対策をとっているのか
- 対応・理解
理解している人／していない人の対応の違い・職場、家族の病気に対する正しい理解が大切・うつ病という名前はよく知られているのに、病気への理解はまだまだ・うつ病のこと、この映画のことを伝えていきたいと思った
- 土足で踏み込む周囲
理解のない親族からの言葉・励ましは時に禁物
- 職場
カミングアウトがしづらい・職場の理解を得る難しさ・うつ病の原因と考えられる仕事を辞める勇気・環境を変える勇気

- 自分を守る
休みたいときは休む・気楽に取り組むほうが良い・「割れなかったから、今ここにある」・「あ・と・で」の大切さ
- パーソナリティ
うつになる人は頑張らないことが苦手なんだろう・ツレは真面目だなぁ・ツレの言葉「うつ病なんかになってごめんね」・妻のために治すのではなく、自分のために治す
- 気づき
変化に気づくことの大切さ・うつ病の始まりは周囲から気づかれにくい・だるい、しんどいから始まるうつ病、見落としてしまう危険性
- 病気
治りかけが一番怖いということ・良いときと悪いときの波が激しい・ツレの言葉「こんなことなら、良くならなければよかった」・うつ病は誰でもかかる病気、他人事じゃない・うつ病の人は意外と身近にたくさん居る
- 病気と付き合う
「心の風邪」というけれど、薬を飲んでも会社を辞めても治らない・上手く付き合っていかなければならない病気・本人も病気を受け入れるのに時間がかかる・薬を飲めば治るという誤解・不安との戦い、葛藤
- 個人差
人によって原因や回復するポイントは違う・うつ病だけの人はあまり居ない（複合的）・うつ病をよく知らない人が映画を見たとき、皆ツレみたいになると思ってしまったら…

4. アンケート結果

(1) 事前・事後アンケートについて

今回は参加者が本企画に申し込んだ時点と、企画が終了した直後の2回にわたってアンケートに回答してもらった。事前事後で比較を行うために、質問の一部は同一のものを使用した。企画終了後にアンケート結果を分析し、グラフにまとめた上で分析を行った。

申込を受けつけてから事前アンケートを行った人数は16、事後アンケートを行った人数は15である。当日は参加者が1名欠席したため、今回分析するには比較のため事前アンケートから欠席

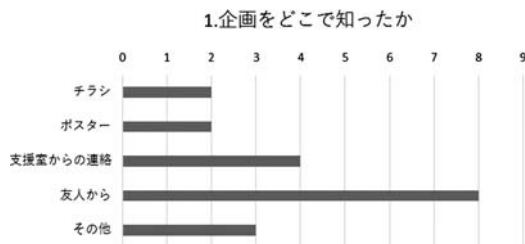
した学生の事前アンケートは除外した状態で集計・分析を行っている。

参加者の詳しい内訳は以下の通りである。

- ・卒業生 7 名
- ・大学院生 1 名
- ・大学生 6 名
- ・その他 1 名 計 15 名

(2) 選択式回答の分析

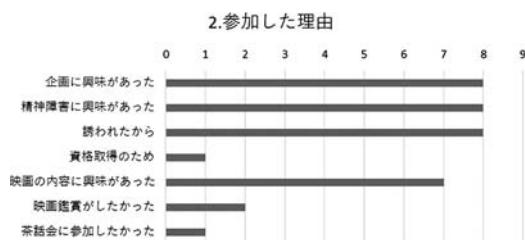
①企画をどこで知ったか



この上映会が行われることを知った手段は、「友人から」が最も多くあげられていた。上映会を開催するにあたって、企画した実習生が卒業生に宣伝を行い、そこから他の卒業生にも連絡が広まったものと考えられる。加えて、本企画はアンチ・スティグマとしての目的他に卒業生の同窓会としての役割も担っていると考えられる。OB・OGにとっては実践教育支援室からの情報が大きいと思われる。

また、開催にあたって実習生らでチラシを作成し、授業内で了解を得て配布や掲示を行った。しかし、映画の一場面をそのまま写真として使用したものであったため、著作権の関係でチラシの配布や掲示は学内にとどまった。12月に人間福祉学部で行われた実践報告会を通じて大々的な宣伝も行ったため、それらを通じて来てくれた参加者もいた。

②参加した理由



参加した理由で最も多かったのは「企画に興味

があった」「精神障害に興味があった」「誘われたから」の3点であった。企画の参加者は社会福祉学科の学生や福祉職として働いている卒業生が大半を占めており、上記にあげたように同窓会のような役割も担っていると考えられる。宣伝は他学部に向けても行っていたが、実際の参加にはつながらなかったのは反省として今後活かしていきたい。

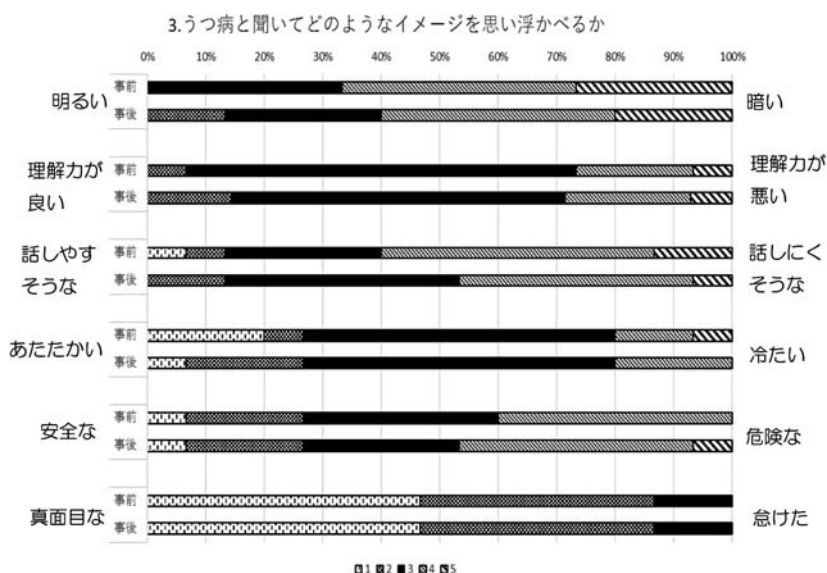
上記3点について多かったのが「映画の内容に興味があった」である。今回上映に選んだ「ツレがうつになりました。」は漫画やテレビの影響もあってすでに有名であり、上映する映画を選ぶ際にも、実習生からも「すでに見たことある人も多いのではないか」といった懸念の声もあった。しかし、出演している俳優が有名であることなどから親しみやすさや参加のしやすさなど、プラス面もあったと考えられる。

③うつ病と聞いてどのようなイメージを思い浮かべるか

事前と事後アンケートでそれぞれうつ病の対するイメージを聞き、企画を実施する前後で比較してみた。このアンケートで使用したイメージの項目は、大西ら(2005)の『『精神医学』受講における学生の精神障害者イメージの変化』より引用したものである。

「明るい」「暗い」の項目では、事前アンケートでは「暗い」に近いイメージが多かったが、事後アンケートではやや明るいイメージが増加した。映画内ではうつ病の症状をネガティブに受け取られないよう描写していたシーンが多く、そのことからうつ病に対してやや明るい印象を抱いたのではないかと考えられる。理解力や話しかけやすさについては事後で「良い」「悪い」両方のイメージに変化があった。映画内では登場人物が真面目すぎる、あまり融通が利かない性格として描写されており、それが影響したのかもしれない。話しかけやすさについては茶話会でも声をかけにくいという意見はいくつか見られた。

一方、あたたかさの項目ではあまり大きな変化が見られなかった。安全性については危険なイメージが増加した点は意外であった。しかし、実習生は「危険」の意味を「精神障害者は行動が予測できない」といった認識を想定していたが、回答



者の中には「自殺しそうで危険」という意味の「危険」と認識した人もいると考えられる。真面目さについての項目では前後でイメージがほとんど変わらなかった。うつ病の人に対し、主人公のような典型的な真面目さのイメージがあるかもしれない。5段階評価の中間である3を選択した人は「真面目な人ばかりじゃなく人それぞれ」や「とても真面目であるとまでは思わない」と考えたのではないかな。

全体的に、事前から事後でネガティブなイメージが増加した。企画した立場としては、映画も全体的に明るい雰囲気であって、主人公のような回復の仕方は順調に進みすぎていて現実はずっと大変なのではないかという声があることを予測していた。それでも、事前から事後でポジティブなイメージが増えると思っていたのだが、それに反する結果になった。今回は参加者に福祉職の専門職が半数を占めておりうつ病患者の実態を知っている人が多かったことと、うつ病をよく知らない人にとっては、うつ病になることが珍しくなくなったため症状が軽いものと思込みがあった可能性もある。後者の場合には、映画での主人公の病状を見て、回復は思っていたより大変なのだと受け止められたのかもしれない。

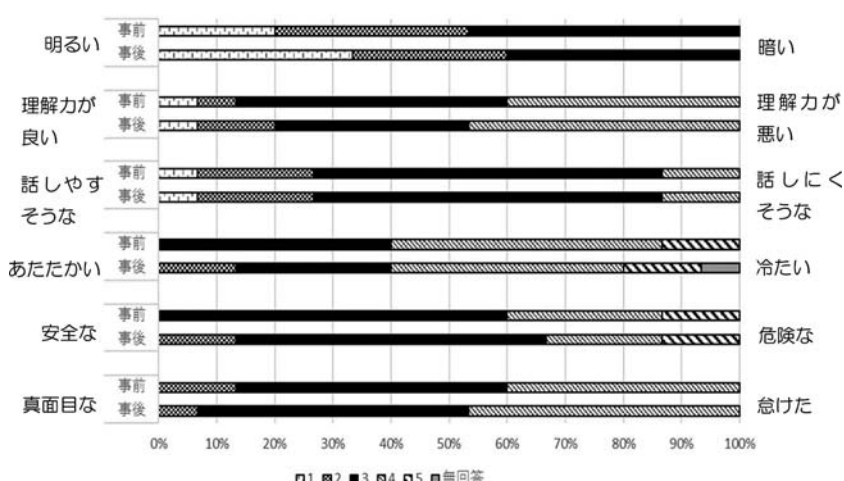
③精神障害と聞いてどのようなイメージを思い浮かべるか

うつ病が身近な病気になりつつあること、映画

内でも主人公に対し「気持ちの問題だ」「みんなうつ病のようなものだ」と症状を理解してもらえない描写があったことから、「うつ病は精神疾患」という認識が、映画ではあまり前面にでていないことが気がかりであった。そのため、うつ病のイメージと同じ項目を使って精神障害に関しても5段階評価でイメージ調査を行った。

明るさのイメージではうつ病のイメージと比べ「暗い」と答えた人はいなかった。精神障害の中には双極性障害なども含まれるので、うつ病と比べると明るい印象があったのではないかと考えられる。理解力についてはうつ病と比較すると「やや理解力が悪い」と答えた人が多かった。今回は専門職の参加が多かったが、一般的な認識では精神障害と知的障害を混同している人もいるのではないかという意見も、事前の企画段階で上がっていた。話しやすさでは事後アンケートで未回答が1名いた。全体の6割が「話にくい」と回答していた。茶話会では「声をかけづらい」「対応に困る」といった意見も上げられていた。あたたかさについての項目では「あたたかい」「冷たい」のどちらにも片寄らない人が全体の6割を占めていた。この印象は個人によるところが大きかったのかもしれない。安全性についてはうつ病と比較してやや危険と感じる意識が見られた。精神障害と聞くとうつ病と比べて怖いイメージがあると考えられる。真面目さに関する項目ではうつ病と比

4.精神障害と聞いてどのようなイメージを思い浮かべるか



較して中間に回答した人が多かった。統合失調症などうつ病以外の精神疾患がストレスで発症してしまうイメージはうつ病ほどないのかもしれない。

(3) 自由回答の分析

続いて、自由回答結果の分析に移る。今回の企画では選択式だけでは図ることができない点が多々あると思われるため、参加者には自由回答でのアンケートに回答してもらった。その結果を分析したものを以下に記す。

まず、はじめに本企画の参加者の声を紹介する。「一人で見たら、『うつ病』についてここまで深く考えることはなかったと思うので、とても勉強になった」「うつとそれを支える人について深く考えるきっかけになった」「自分や自分の周りの人がうつになったがどうしよう、何ができるかと考えるきっかけになった」というような意見が出た。また、4月から就職する4年生から、「これから就職するので、働き方とか気持ちの面で不安などあるが、自分だけではないと思い、元気づけられた!」という意見も頂いた。他に改善点として、感想を分かちあうことは普段からすることなので、プライベートで映画を観ることとの差異がもっとあれば良かった、という意見もあった。

自由回答も事前と事後の二回に分けて実施しているの、その比較を試みた。劇中でツレが自分

を「怠け病」だと責めながら布団から出ることができなかったとき、ハルが取った行動についてどう思うかという項目も設けた。事前では選択式、事後では自由記述式で、参加者に自分自身はどのように行動すると思うか尋ねた。その結果、事前アンケートの結果では81.3%が「つらい気持ちに理解を示し見守る」、18.8%が「気分転換のため外出に誘う」と回答した。事後アンケートでも「見守る」と回答した人が多かった。

この点については、事前アンケートでは5つの選択肢から「見守る」を選択した人が多かったが、それと同様であった。「見守る」と回答した人の中には、頭では「見守る」ことが大切だと分かっているが、家族や身近な立場だと実際に見守る行動ができる自信がないと考えた人も複数いた。難しいからこそ、「ハルの決してツレを非難したり否定したりせず、ありのままのツレの姿を受けとめる姿勢に感銘をうけました」という意見もあった。「見守る」以外の回答では、「布団を同じようにかぶりツレの気持ちを考えてみる」というものもあった。今回は参加者に専門職が多いためうつ病の人を励まさないといったように、理解度の高そうな回答が多くなったが、一般社会の中では周知されているとは言い難いかも知れない。

企画に参加した前後の意識の変化を聞いた項目では、うつ病を身近に感じたり、うつ病の知識やどう接したら良いのかの理解が深まったりした、という意見が多く出た。このことから、今回、う

うつ病をテーマにアンチ・スティグマのイベントを企画した効果という意味では一定のものが見られたのではないだろうかと考えたい。一方で、当事者やその家族の苦しみがまだまだあることに改めて気付かされたという意見もあった。

5. おわりに

最後に、企画を行った実習生の立場で総括してみたい。2017年度実習生は、上記の通り、精神障害に対するアンチ・スティグマ活動の中でも、うつ病をテーマに取り上げ映画上映会を行った。近年、うつ病という病名を耳にすることは増え、一般的な病気として認識されるようになってきている。しかし、うつ病患者に対する適切な対応方法や支援のあり方について、まだまだ正しい理解は浸透していない。それどころか安易に周囲から「怠け病」だと捉えられるなど、うつ病の病状に対して誤解が生じていることも少なくない。また、そうした風潮があるがゆえに、自分自身がうつ病にかかることを恥ずかしいことだと思い、精神科を受診することに抵抗を感じてしまうこともある。うつ病を社会がどう付き合っていくかは、ようやく本格的にはその一歩が始まったに過ぎないのである。

今回、アンチ・スティグマ活動を自ら企画運営する立場となったのであるが、実習生自身、うつ病について完全に理解しているとは到底言えないという自覚があった。そこで、実習生自らが知識や情報を発信していく立場になるだけでなく、「自分や身近な人がうつ病になったとき、自分ならどうするか」を参加者と共に考え、共有していきたいというスタンスでこの企画に臨んだ。そして、その題材として選んだのが、映画「ツレがうつになりまして。」であり、うつ病という重いテーマを、柔らかくコミカルなタッチで描かれている。精神障害をテーマに取り上げた映画の中では知名度も高いため、精神保健福祉を専門的に学んでいる学生だけでなく、学部・学科を問わず幅広い学生に参加してもらえるのではないかという願いも込めて、この映画を上映することになった。

そこで、多くの人の参加を呼び掛けるために、授業内宣伝でチラシを配布したり、学内の掲示板に貼ったりと、実習生で出来る範囲の広報活動を

行ってきた。しかし、なかなか参加者は伸びず、開催1ヶ月前時点での参加申し込み者はたったの4人であった。茶話会でグループワークが出来るだけの人数を集めることができるのかと不安を抱えていたが、その後の広報活動の効果もあってか、当日は総勢20名の方々からの協力を得て、無事に映画上映会、茶話会を終えることができた。

2017年度実習生は、リーダーとして集団を引っ張るタイプがいるわけでもなく、率先して新しい物事を開拓していくようなパワーを持ち合わせているわけでもない。5人ともリーダーを影から支えるフォロワータイプである。それゆえに、このような企画を5人が主体となって1から作り上げていくことに、最初は大きな不安を抱えていた。しかし、実際に準備を進めてみると、準備段階でしんどさを感じることは少なかった。その一番の要因は、5人がそれぞれの強みや性格を理解して、各々にとって負担の少ない役割を担うことができていたからだと思う。

また、事前に行うべき物事を全て書き出して担当者を決め、どの時期に誰か何をすべきかを一目で分かるようにガントチャート化できていたことも、大きな安心材料になった。今年度実習生の学年カラーは、近年の実習生と比べると「色の薄い」ものであったかもしれない。しかし、同じ歩幅で歩んでいる5人だからこそ、私たちはお互いに居心地が良かった。逐一報告・連絡・相談を行い、不安なことはすぐに共有し合える5人だからこそ、一緒に壁を乗り越えていくことができたことは誇りとしたい。

(謝辞)

私たち実習生5人だけでは、この上映会を企画・実施することは出来なかったと思います。企画の方向性についてご指導くださった松岡先生、風間先生、連絡調整等に加え私たちを日々近くで支えてくださった伊藤先生、手話通訳を引き受けてくださった平先生、小島先生、学内の上映にご理解くださった東映株式会社、また、企画に参加してくださったみなさまにこころより感謝申し上げます。そして、この企画実施をお認めいただき、かつさまざまな支援をしてくださった人間福祉学部研究会と事務室のみなさまにも厚く御礼申し上げます。みなさま、本当にありがとうございました。

2017年度 関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科
精神保健福祉援助実習履修生

久保田マリコ、古結香南、野口真由美、正岡芽実、
山中美佳

文献

大西良・辻丸秀策・鋤田みすず・大岡由佳・山口智
也・岩永直美・福山裕夫(2005)『『精神医学』受
講における学生の精神障害者イメージの変化』久
留米大学文学部紀要 社会福祉学科編第5号:37
~46.

(松岡 克尚)

講演とワークショップ

「財政破綻のまち、夕張市の再生への希望」

10月8日(月)、鈴木直道夕張市長を講師にお
迎えして、G号館111号室を会場に、表記の講
演会を行った。出席者は小西ゼミの3年生と4年
生15名であった。

*

講演会に先だって、準備学習の意味もあって、
6月2~3日にかけて、夕張市においてゼミとし
てフィールドワークを行い、また、別途8月上旬
にゼミ生2人が夕張市でフィールドワークを経験
している。また、講演会の直前に、ゼミの時間帯
に夕張市の財政破綻問題については事前学習を行
っている。そこで学んだことは以下の通り。

○平成19年3月に財政再生団体(平成22年3月
に地方公共団体財政健全化法に基づく財政再生団
体に移行)。

○夕張市では、財政の再生については着実に進行
しているが、大幅な人口減(平成18年3月31日
の13,268人→平成27年12月31日には9,056人、
約9年間で30%以上の大幅な減少)。

○住民のなかには、地域の再生について希望がな
く、地方創生のスタート台にも立てていないとの
声があった。

○夕張市では、「夕張市の再生方策に関する検討
委員会」(以下、検証委員会)を設け、破綻後、
約10年間で夕張市にどのような変化が生じてき
ているのか、その成果と課題を検証し、夕張市の

行財政・地域などの再生をより確かなものとして
いくという観点から、今後の方策を検討した。

○検証委員会は、夕張市は地方創生実現のための
財政再生計画の再計算(収支計画の全面改定)を
通じて、財政再生と地域再生の調和に向けて新た
な段階に移行することを求めることとした。そこ
では、再生終了後を見据えた市政運営に段階的に
移行していくことが適当との意見を取りまとめた。

○検証委員会報告を経て、平成28年度には、総
務省と北海道に対して、財政再生計画の抜本的見
直し実施に向けた協議を行い、計画の抜本的な見
直しを行うこととなった。それによって、地域再
生と財政再建を両立させる方向に大きく舵を切る
こととなった。

○鈴木直道夕張市長は、そのような夕張市の厳しい
財政再建と地域再生の取り組みの陣頭に立っ
て、これまで着実に成果を積み重ねてきた。

○財政再建のための取り組みは最優先であるが、
地域再生に向けてさまざまな取り組みを展開して
いる。フィールドワークで体験したのは、夕張高
校魅力化プロジェクトとして、夕張市公営塾「夕
張学舎キセキノ」の開催、炭層メタンガス
(CBM)試掘事業、市営住宅の建て替え、コンバ
クトシティの推進と清水沢地区における拠点複合
施設の建設推進などの各種の取り組みである。

*

講演会の当日、市長から大部の資料の提供があ
り、それに基づいて、次のようなお話をしていた
だいた(以下は、小西の文責において、講演のボ
イントとなるところを取りまとめたものである)。

○夕張市は、戦後すぐは人口が6万人程度であ
ったが、石炭産業の隆盛によって、1960年のピー
ク人口は116,908人であった。しかし、その後、
石炭産業の衰退によって人口は激減し、現在は1
万人を下回っている。

○財政破綻後すぐに作られた財政再生計画(後に
財政再生計画)を10年を期に見直すことができ
た。破綻後、人口減が急激であって、財政の再建
ができて人口減少が止まらなければ第2の破綻
であり、なんとしてもそれを食い止める必要があ
った。

○夕張市には、全国的に有名な夕張メロンがあり、知名度もある。また、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭もよく知られていて、破綻後は市が映画祭を支援ができなくなったにも関わらず、NPO が継続してくれている。

○財政破綻によって、夕張市には悪いイメージが定着してしまっていて、マスコミの報道も、高齢者がたたずみ野良猫が歩き寂れたまちなみや、かつての観光施設の跡地の映像が流れるばかり。

○石炭産業が、戦後しばらくの間、華やかであったのは、かつては、製鉄のために必要な自前で調達できるエネルギーであったからだ。国のエネルギー政策の転換で石炭産業がだめになり、そのあおりを夕張市は食ってしまった。

○そこで市は、観光産業への転換を図って、雇用を生み出し、地域振興を進めようとした。ある程度は成功し、当時の自治省からは地域振興に熱心ということで、優良地方公共団体として大臣表彰されたこともあった。ところが、なかには相当問題含みの無理な事業もあり、次第に集客ができなくなり、結果的に、全体としては夕張市の債務を大幅に増やす結果になってしまった。

○財政破綻によって職員数は3分の1になり、幹部職は3人しか残らなかった。市役所の体制が整わないなかで、厳しい財政再建をせざるを得なくなった。

○準用再建団体となったが、標準財政規模の8倍の負債を背負うこととなった。これを18年で返済する計画を作らされた。夕張市の前に準用再建団体となった福岡県赤池町は130%の赤字を9年で返済する計画であったので、夕張市の計画はどれほど深刻であり、相当無理があることがわかる。

○現在の自治体財政健全化法では、早期健全化段階が設けられて、予備的に破綻を防ぐ仕組みがあるので、第2の夕張市は現れないはずである。

○10万人市がわずかに8千人になった。市としてダウンサイジングが必要であるが、そのための財源はない。

○その一方で、夕張市は人口減だが、ゆっくりとしか減っていかない。それに対し、大都市は今後急速に人口が減少する。大都市の方が今後は厳しい。2065年に日本全体で高齢化率が38.4%にな

るが、それは夕張市が破綻した直後の水準と同じである。夕張市は借金を返しているが、日本全体では借金は増えている。その意味では、夕張市は日本の象徴であり、金がなく人もいない。そのなかで、どのように未来を切り拓いていくか。

○財政再建が進むなか、市長に就任した。それから8年たって、自分より若い市長はただ1人しかいない。人口減少、少子高齢化、財政難の三重苦だが、市長職はやりがいのある仕事だと感じている。

○政治の話は面倒がられたり、嫌がられたりする。ことは多いけども、何をしても政治の話にぶつかるので、みなさんも何らかのかたちで政治の話に関わった方がよい。

○夕張市の市街は細長く続くかたちをしている。かつては炭鉱の抗口ごとに集落ができ、学校ができるようなかたちで発展したからだ。最盛期には集落ごとの1つの市になるくらいの人口が集積していたが、急激な人口減少によって広域的に分散した姿になっている。市営住宅がたくさんあるが、それは炭鉱会社が持っていた住宅、いわゆる炭住を5千戸も引き取った経緯があるからだ。

○コンパクトシティを作ろうとする際に、破綻したことがプラスに働くこともある。公共施設の集約化には住民の反対も多くたいへんであるが、夕張市では財政再生計画によって、小学校6校を1校に、中学校は3校が1校に統合し、市民会館や図書館は廃止した。公営住宅が中心で民間住宅が少ないことも、コンパクトシティには有利。公営住宅の建て替えに伴う転居には、住民のなかで反対する人もいたが、かつていちばん反対していた人が、新しい住宅の快適さを知って、いまは最高の説明役になってくれている。

○JR 北海道の夕張線があるが、いずれは廃線を持ちかけられることが予想されたので、市長としてイニシャティブをとるため、先手を打って、JR に廃線を提案する代わりに、廃線の条件を提示した（市が進める施策への協力、JR が保有する施設等の扱い、社員の市への派遣）。そのことで、JR からは満額回答を引き出すことができた。

○スクールバスの運行適正化に向けて、中・高生にさまざまなアイデアを出してもらった。コンパクトシティの核となる拠点複合施設の建設計画が

進んでいる。

○他にもさまざまな取り組みを進めているが、そこで着実に問題を解決してきている。日本は課題先進国だが、そのなかでも夕張市は課題先進地である。

○夕張市は、課題先進地から課題解決先進地をめざして、歩み出している。

※

学生たちは市長の話に熱心に聞き入っていた。多くの課題を率先して担う若い市長の姿に感銘を受けた様子であった。最後に、講演会終了後に、学生たちが市長宛に残したメッセージの一部を紹介する。

○先日は、貴重なお話ありがとうございました。夕張の状況が、未来の日本であるというお話はとても納得できました。そして、課題解決先進の地域として困難に向き合いながらも、道を切り開いていく市の取り組みを今後も学んでいきたいなと思いました。

○私が夕張に関心を持ち、学びたいと思ったのは、課題先進国であるからこそ、今、そして今後のためになる大きな学びがあるだろうとおもったからです。今日のお話の中では、課題解決先進国であるというお話を伺い、まさにリスタートに向けて課題解決にさまざまな視点で取り組まれていること、そしてその課題が生まれた背景をわかりやすく学ばせていただけて、嬉しかったです。その一つに、関係人口をどう増やしていくか、ということはとても大事な、若い世代が増えていったらいいなとおもっています。現地に行き、自分の肌で感じたり、お話を聞く、活動するなどの経験があれば、遠く離れたところに戻っても、その地のことを気に留めることができると考えます。災害被災地域には、全国各地に若いボランティアがすぐ駆けつけるように、今、前向きにリスタートした夕張に、若い世代、外部から多くの方が訪問し、今の夕張を知ることができればなと考えたりしてました。マスコミや SNS を通して、プラスのイメージがどんどん発信されていくのを願いつつ、一方で、財政破綻という事実とそこからの復活、その時代に給与カットなどで苦しい中でも頑張ってきてくださった方がいたことも、伝えられるような発信であってほしいと思います。最後

に、高齢化が進む今、高齢者問題なども課題の一つだと思いますが、私はこの高齢者の方にぜひ役割を持ってもらい、働いてもらう機会として、今話題の「注文をまちがえる料理店」を夕張で実施してみたいと考えています。夕張の魅力は、課題と借金があること、その魅力を活用し、逆手に取り、この料理店の企画を密かに本気で考えております。心にしみるお言葉もいただけて、これからの学びに対して、プラスのイメージが広がったり、インスピレーションが湧きました。

○お話から、当事者意識について考えさせられました。夕張の問題は夕張だけの問題ではない、日本の問題という言葉が印象に残っています。なぜリスクを背負ってまで縁もゆかりもない土地、夕張の市長になるという決断ができたのか、疑問でしたが、夕張の問題が今後の自分たちの問題として向き合うべきものだと思えていることに納得できました。また当事者意識を持つことだけでなく、覚悟を決めて行動に移すことができる市長のすごさを感じました。今後もお仕事頑張ってください。○先日はお忙しい中、講演していただきありがとうございました。6月の夕張市でのフィールドワークにおいて JR 北海道の廃線をお伺いしましたが、決定に至るまでのお話を市長から直々に聞くことができ、とても興味深く、面白かったです。また、移転反対者と根気強く向き合い、うまく巻き込むことで市民を動かすなど、地道な努力が結果に繋がったのだなと感じました。是非また、夕張を訪問させていただきたいなと思います。

(小西砂千夫)

●講演会

「英国・レスターにおける緊縮財政の統治」

講演者：ジョナサン・デービス教授

(デ・モンフォート大学)

日 時：関西学院大学 2018 年 10 月 24 日

13 時 30 分～15 時

会 場：G 号館 101 教室

参加者：約 260 名

講師紹介

ジョナサン・デービス教授：専門は公共政策・都市政策で、批判的政策研究（Critical Policy Studies）の第一人者。デ・モンフォート大学では、緊縮財政に関する都市研究センターの創設者。ヨーク大学で学位を取得し、2001年から2011年までウォリック大学で教鞭をとり、現在に至る。

主な著書

Partnerships and regimes: the politics of urban regeneration in the UK, Ashgate, 2001.

Challenging Governance Theory: from Networks to Hegemony, The Policy Press, 2011.

1 私たちの緊縮財政統治に関する研究

都市が緊縮財政の政策によって支配され、都市がどのように抵抗していくのか、態様をどのようにわれわれは説明できるか？これは興味あるテーマである。都市はそれぞれに個性を持ち、実に多様である。いくつかは大規模の緊縮財政を実施しており（アテネ、ボルティモア、ダブリン、レスター）、都市によっては緩い実施のところもある（ダンデノン、ナント）。また、激しく抵抗する都市もあり（バルセロナ、ダブリン、モントリオール）、あまり抵抗しない都市もある（レスター）。私の住むレスターは、緊縮財政がどのようにマネージされているのかという疑問がある。

レスター市を説明すると、かつて繁栄した産業都市である。1970年代と80年代には、サッチャー改革の下で、産業崩壊に陥った。以来、同市は非常に多様な多文化都市を形成している。イギリスでは中規模の都市規模で、人口342,000人を擁している。貧困度は高水準にあり、住民の生活状態は非常に悪く、しかも貧困が見えにくい地域もある。この都市の搾取工場による労働は写真が示す通りである。（写真説明 移民労働者を搾取する工場の風景、デービス教授撮影）

2 反乱から「緊縮財政リアリズム」へ

レスター市の地方政治に目を移してみたい。市議会では労働党支配の下にある、54議席中52議席を労働党議員が占めている。公選による市長はピーター・ソウルズビー卿で、かつては労働党に共鳴していたが、今は中立のバランス感覚に立った



講演の様子

政治を行っている。

3 国家の緊縮策と地方政府

サッチャー元首相時代の1980年代以来、英国の地方自治体は、地方自治体の異議を容認しない中央政府の下で地方自治は弱体化した。地方自治体は、緊縮財政から非常に深刻な影響を受けており、貧困地域の影響は最悪である。またレスター市の予算準備金は底をついた。特に政府が平衡交付金を廃止したことは自治体財政に壊滅的である。地方自治体は10年近くに及んだ緊縮財政の後に、遂に破綻し始めた。

4 緊縮財政下のレスター市

レスター市は、高い失業率と劣悪な労働環境による貧困が蔓延している。これは何千もの人々に影響を及ぼす「社会的再生産」の危機につながるものである。この事態とあわせて、凄まじい「ワークフェア」体制が敷かれている。加えて、ボランティアおよびコミュニティ部門も補助金削減により弱体化している。

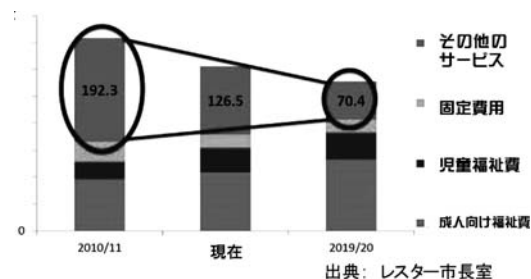


図1 緊縮財政下のレスター市議会 市議会予算(2010～2020)

緊縮財政下のレスター市議会予算の図にある「その他の行政サービス」の項目をみてほしい。実に半分以上に予算が減っている。緊縮財政は市議会や地元のボランティア・コミュニティ部門（VCS）からの抵抗をほとんど受けずに実施された。労働組合や社会運動、反緊縮活動家からいくらか抵抗はあったものの、それは限定的な影響にとどまった。

しかし、期待された「抗議の叫び声」は上がらなかった。

「私たち地方関係者が実施しなければならない施策の多くは、緊縮財政の影響を受けた人にとっては辛いものでした…しかし、これは実際には十年かそれ以上前には政策論争の対象になっていたはずなんです…それが今は、緊縮と耐乏の多くはほとんど音を立てることもなく起こっているんですよ」（ある議員の証言）。

では、緊縮財政を「統治可能（governable）」にするのは何だろうか？

5 緊縮財政ガバナンスをいかに分析するのか？

この解は、アントニオ・グラムシの理論にある。彼はマルクス主義国家理論家で、「統合国家」（インテグラル・ステート）という理論を打ち立てた。これを本日のテーマである都市ガバナンスに当てはめてみたい。地方自治体は、緊縮財政を統治するために他の社会集団とどのように提携関係を結ぶのか？ここにポイントがある。

6 統合国家（インテグラル・ステート）

統合国家とは、社会秩序を維持することを目的として、政府と市民社会が結託し、二者の間で持続的で、強制的かつ合意的な関係を構築することをいう。グラムシにとって、市民社会は国家権力に向けた闘争が起こる場であるはずが、政府は効果的に統治するために様々な社会集団との提携を構築するのである。

7 市民社会—不平等でヒエラルキー的なもの

21世紀の市民社会はヒエラルキー的である。すなわち、資本家階級や財界、国家に深い関わりを持つ多国籍 NGO やメディア、教会、慈善団体といった大規模の組織によって支配されているの

である。市民社会はわたしたちの密接にかかわる場であるが、ブルームズバーグという影響力を持つチャリティは、世界を支配する市民社会組織であることを銘記して欲しい。繁栄する資本主義国家は「市民社会の頑丈な構造」によって強化されている。そうでなければ、強制（coercion）を使用することになる（グラムシ）。市民社会の重要な要素は、草の根の運動から国家を守り、体制堅持のアイデアを生み出すために貢献するところにある。

8 グラムシ主義のローカル・ステート論

グラムシ主義者はローカル・ステートを「包括的な意味」で捉える。図式で示せば、以下の通りになる。

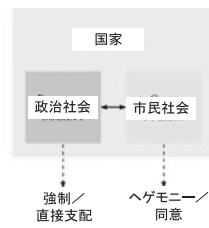
強制（コアーション） + 同意（コンセント）
政府機関 + 市民社会

緊縮財政の統治可能性を理解するためにはこの構図の理解が不可欠である。次は、ワークフェアの研究を通して解説である。

1. 自由主義国家



2. 「統合国家」



Moritz Sommer - https://essay.utwente.nl/62846/1/BA_Moritz_Sommer_-_Gramsci_in_Brussels.pdf

図2 統合国家の構成

9 緊縮財政ガバナンス：レスターにおける戦略と戦術

次は、インタビュー調査からの引用である。「緊縮財政リアリズム」：「残念なことだが、現実的な選択肢がないので緊縮財政を追求する」。「仕方がないこと。他に代替がないから。」（TINA, There is no alternative, 運命論で状況に流される時に使う言葉）体制からは、「能力があるなら、それを示してみろよ。」「危機という言葉はあえて使わない。」：このようなことは日常ではいつものこと。Business as usual このように緊縮財政リアリズムは、地方自治体や地元の市民社会全体で機

能している強力な思想になっている。グラムシ的には、英国の集権的な統治文化に根ざした「ヘゲモニー的な」理念なのである。

10 「緊縮財政リアリズム」を理解する

“中央政府のより厳しい監査では自分をさらけ出すことになります” … “事態を悪化させるようなさまざまな施策を打っているのです” (ある行政幹部)

「もうお上げだと言っている政治仲間がいますね。ドラマや諍いはこのまちにとって最善の利益ではないみたいです」 (ある議員)。

「まあ、それはちょっとした…負け試合なんてもんじゃありませんね。私も過去に死ぬほど頑張ったんですが、上手くはいかなかったんです。持っている力もなくし、勝ち目のない戦いをするようなもんです」 (ある活動家)。

言い換えれば、「緊縮財政リアリズム」とは、緊縮に反対するものの、それを行動に移すまでには至らないことを意味している。

11 緊縮財政と「ワークフェア」

「ワークフェア」とは、就労活動をしなければ、国が福祉手当を打ち切ることを意味している。これには、緊縮財政下の労働年金省による給付改革が背景にある。レスター市では非常に厳しい給付「制裁」があり、数万人の給付が打ち切られた。その結果、住民がフードバンクを利用するに至っている。

ワークフェアを提供する「大きな」市民社会組織と政府のパートナーシップが個々に見られる。市議会と地元のボランタリー・コミュニティのセクター (VCS) は最悪の被害を軽減しようとしている。しかるに、その VCS も緊縮財政でひどく弱体化しているのである。

12 弱体化する市民社会

「議会の予算削減は、人々が理解するよりも大きな影響を与えていると考えています。そして、何かが崩れ落ちることがはっきりと分かるのには、もう少し時間がかかるかもしれません。この事態を招くと本当に気づいたのは2~3年前でしょうか。私たちにそのことを伝えてきたつもりで

すぎる。もちろん早晩、これらの影響は年月を重ねて蓄積されていきます。強い市民社会を再生するには長い時間がかかります。まあ、それは倒されてしまった木を植えるようなものです。市民社会が再び活発化するのに数年はかかることでしょ…」 (あるレスター市議会議員)

13 社会的疎外

「体制側の人たちは、なぜイギリス人はギリシア人のように蹴散らされていないか、などと言うでしょうかね。」「誰もが自分たちの個人的な危機に向かい合うように仕向けられているのは、まさに問題だと思います。社会的危機に対処しようとすると、物事をより広い視野で見る必要がありますが、それは非常に難しいことです。みんなで考えれば、潜在的にはすべての個人が助かると思います。けれど、自分に影響する目先の変化だけに目を奪われます。フルタイムの仕事もそういった種類のものです。」 (ある VCS 職員)

14 「包括的な」意味でのレスター市のワークフェア国家

ワークフェア・ガバナンスはいくつかのアクターに依拠している。労働年金省 (DWP) は社会給付の管理を梃子にして、地方の政策課題を設定している。それは大規模な企業や市民社会組織と契約し、ワークフェア契約を提供しているのである。

15 LCC は危機の話を最小限に抑えるー「緊縮財政リアリズム」

レスター市議会と地元 VSO はワークフェアの危機管理に取り組んである。ワークフェア連合はグラムシの包括的意味での「ローカル・ステート」を形成している：(政府+地方自治体+大市民社会)。この連合に加わる者は、異なるアジェンダと信条を持っていても、同じ方向に引導されているのである。

16 草の根キャンペーン

「その他の行政サービス」の大規模な削減を説明したが、復活を求めて住民が運動を展開している。その中には、閉鎖された図書館、消防署、心

臓外科診療科が含まれている。(写真説明 レスター市の公共資源の処分への反対意見を募るサイト)

17 結論

地方の「統合国家」は、効率的に緊縮を実施してきており、これに対する抵抗も限られたものであった。しかし、英国政治の物語はこれで全てではない…ジェレミー・コービンと新しい左派の台頭—「新しい自治体主義」に民主主義復活の兆しが見える。そして勃興する国際運動…#FearlessCitiesにも触れてみたい。

国際運動：#恐れを知らない果敢な都市 (Fearless Cities)

強制・弾圧を恐れない果敢な世界には都市もある。住宅の権利、居場所を求める声があり、フィアレス・シティの国際会議がある。このような草の根の運動を注視する必要がある。

ご静聴ありがとうございました。

講演に関するコメント

グラムシによれば、資本主義国家は狭い階級的利益によって結びついているだけで、安定した体制ではない。むしろ体制を安定させるために、他の従属的階級を教育し、現状に馴化するような合理化の世界に定着させてしまう。したがって、一般の思考様式、行動様式、道徳は、資本制経済に適合するようなスタイルを暗に強制されることになる。

この任務に仕えるのが、さまざまなアソシエーション(結社)である。ここで「市民社会」と呼ばれている領域は、権力を持つ階級や社会グループが、さまざまな結社を通じて、他の階級や社会グループから合意を得ようとする活動空間となる。グラムシのいう広義の国家は、強制力の体系としての狭い意味での国家だけでなく、それを支える合意とヘゲモニーの体系としての「市民社会」をも包摂することになる。

グラムシのデービス教授は、グラムシの理論にそって、今日のガバナンスを読み解いている。講演では、英国の緊縮財政がもたらす市民生活・福祉への影響、緊縮財政が統治可能である理

由、乗り越えるべき課題を明快に解説した。特にワークフェアへの言及は参考となり、給付抑制と就労の強制についても講述し、大変参考になる内容となった。学生の反応も良く、講演終了後も1時間あまり議論に加わる学生がいた。コメント・ペーパーも視野が広がったとの意見が大半を占めた。

(山本 隆)

●講演会

「ソーシャルワークにおけるメゾ領域の変革を検討する」

1. 中島康晴氏の紹介

今回の講演者である中島康晴(なかしま・やすはる)氏の簡単な紹介をまずしておく。中島氏は、1973年生まれ。花園大学を卒業後、13年前の1995年に広島県に特定非営利活動法人「地域の絆」をたちあげ、代表理事に就任、その後、2015年度から公益社団法人広島県社会福祉士会相談役、2017年度から公益社団法人日本社会福祉士会副会長を歴任している。また、2014年度より、東北大学大学院教育学研究科博士課程に在学している。著書としては、「地域包括ケアから社会変革への道程【理論編】—ソーシャルワーカーによるソーシャルアクションの実践形態」批評社、「地域包括ケアから社会変革への道程【実践編】—ソーシャルワーカーによるソーシャルアクションの実践形態」批評社がある。

2. 講演会の内容

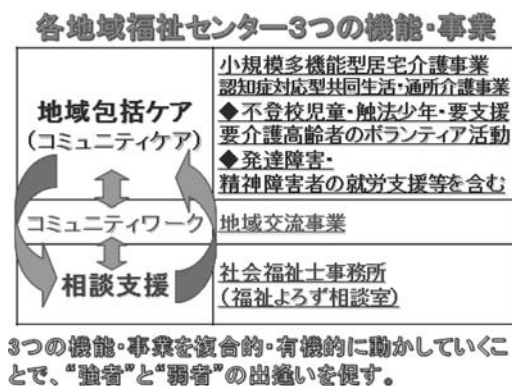
講演会は11月29日木曜の午前11:10からG号館202教室で行われたが、学部生、教員など計100名近くの参加があった。

1) 非営利活動法人「地域の絆」について

非営利活動法人地域の絆は、13年前に広島県福山市で立ち上げられた。その後、拠点と活動内容を次々と広げ、現在は、広島県内で様々な福祉事業を提供しており、小規模多機能型居宅介護事業、認知症対応型共同生活・通所介護事業、不登

校児童・触法少年・要支援要介護高齢者のボランティア活動、発達障害・精神障害者の就労支援、地域交流事業、社会福祉士事務所等の事業を行う事業所が11カ所ある。

地域の絆には、3つの機能・事業がある。一つは、地域包括ケア、いわゆるコミュニティケアであり、これは様々な課題やニーズを抱えながらも地域で生活するサービス利用者に対してサービス提供するという機能・事業である。2つ目は、社会福祉士事務所と位置づけている相談支援機能・事業である。ここでは、現在、サービスを必要とはしていないが、何らかの相談事のある住民に対して相談支援を提供している。3つ目は、地域包括ケアと相談支援の中間に位置づけられるコミュニティワーク機能・事業である。地域の絆の特徴は、このコミュニティワークの機能を重視しているところにある。地域の絆のスタッフは、その業務の中に地域の人々との交流を入れており、地域住民との日常的なつながりや関わりを大切にしており、また、地域の様々な団体に、施設にある地域交流の部屋を貸し出したりして、地域交流を意図的に行っているのである。具体的な事業としては、ボランティア制度の活用、ペットボトルキャップ・プラスチックトレイの回収、子どもを対象にした教室の開催、自治会活動への参加、子ども会との連携、会議場所の提供・行事の共同開催、喫煙中（休憩中）における地域住民との交流などがあげられる。これらの3つの機能・事業を図式化したのが下図である。



中島代表は、これらの地域包括ケアの要諦を次のように述べている。

「重大な自傷他害の恐れのない以上、ここで暮らし続けたいその人間の思いを否定する権利は誰にもない。どの場所で暮らし、何処で人生の最後を迎えるべきかを決めるのはその人自身である。この人間の尊厳にかかる大前提が、障害の有無によって、所得の高低さに応じて、また政府の方針に依拠して、その自由が狭小させられることなどあってはならない。これら人びとの自由を最終的に擁護するのは、新自由主義の名を借りた政府の責任放棄ではなく、社会保障とソーシャルワークの新たな関係の構築に向けた努力である。多様な方法を明らかにし、政策提言に繋げる。」

このような代表の理念が様々な事業となり、各スタッフもその理念を意識して実践しているところに地域の絆の特徴があるといえる。

2) 出逢い直しの理念

次に、中島代表は、地域包括ケアを実践する上で、地域の人々と様々な課題を抱える利用者との間には、差別、偏見、無理解などがあり、それが両者を分断させることにつながっているという前提にたち、両者の関係を修正するためには、「出逢い直し」が必要だという仮説を立てて、それを実践している。代表によると、人間の尊厳を毀損する2つの視座があり、その一つは、人びとの社会的権利を保障する社会保障を中心とした（教育・文化・芸術・自然環境保全・防災などを含む）制度・政策の減退であり、もう一つは、人びとの互酬性と多様性、信頼関係の毀損があるとしている。特に、2つ目の関係構造・関連構造の変革は、全てのソーシャルワーカーがなすべき社会変革の起点であるとしている。

中島氏は、ニコラス＝ルーマンの著書（ニコラス＝ルーマン、訳：土方透・大澤善信（2016）『自己言及性について』筑摩書房）を引用し、人々の対面的相互作用の現象を以下のように述べている。

「書き記すことの発明は、すでに相手が目の前にいることや対面的なコミュニケーションの境界といったものを超え出るという機能を満たしていた。普及は、書き記すというメディアによって達成されるだけでなく、情報を一定の固定された形態で保存するべく意図されたその他の

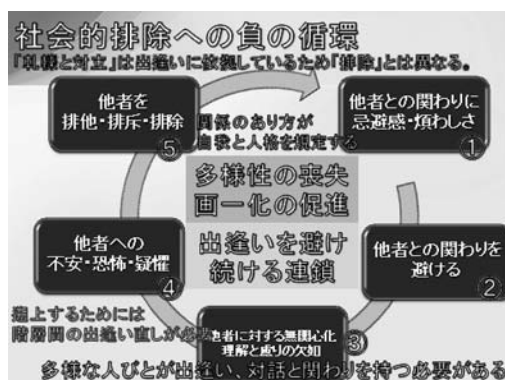
手段によってもなされるものである」P.60。
 「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアは、普及技術によって対面的相互作用の諸境界が超越され、またそこに居合わせない不特定多数の公衆のために、またいまだはっきりとは決定されていない諸状況のために情報を貯えおくことを可能にする段になってのみ存立するものである。換言すれば、それらは、一般的に利用可能な形に書き記すという形式が先行して発明されていることに依拠しているのである。大いに拡張されたコミュニケーションの可能性に直面して、ひとびとが物理的に目の前に居合わせることに依拠した相互作用システムによって与えられる成功の保証は、次第に衰えていく」P.61。

「印刷術の発明はあきらかに、社会システムの重要な諸機能が実現される諸条件のまさに迅速な転換をもたらした。結局は多種多様な教派へと分裂するはめになった宗教的ラディカリズムの展開のほとんどは印刷術のせいであると考えることができる。というのも、印刷術は諸見解を公然と明確に具体化し、著者がひとたびある見解に関係づけられてしまうと、その立場を撤回することが困難になったからである」PP.67-68。

「(前略) 象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアのいずれにあっても、教育から治療処置、そしてリハビリテーションにわたって、個々人における変化を引き起こすべく構想された多種多様な諸活動を—それがコミュニケーションに全面的に依存した機能領域であるにもかかわらず—支持するように発展させられてきたわけではない。この分野においては、パーソナルな相互作用が変化の望ましさをひとびとに確信させる唯一の方途のままである。厳密に言えば、この目的に合ったどんな科学的に信頼できるテクノロジーもこれまでのところは存在していない」PP.66-67。

人々との相互作用が減少すると、下図の①のように、他者との関わりが煩わしくなり、それが次に他者との関わりを避けるということにつながり、その結果、他者に対する無関心・無理解と慮

りの欠如となり、そして、それが他者への不安・恐怖となり、最後には、他者を排斥・排除するという結果となり、それが循環することで、社会的排除の負の循環となっていると説明するのである。ソーシャルワーカーとしては、この循環を断ち切るということが必要であるとしている。



中島氏は、その負の循環の背景には、「出逢いの不在」があるとしており、彼は次のように述べている。

「全人口に占める障害者の割合は、約 10% といわれている。

ライフステージ毎に顧みれば、まず、中等度から重度の障害児の多くは一般の保育園・幼稚園には通園していない。中等度から重度障害のある乳幼児は専門の施設等におけるサービスを利用することになる。

小中学校では、学級や学校が峻別されその接点はさらに減退させられている。

大学、短期大学及び高等専門学校においては、障害者の割合は 1% 未満へと低下してしまう。そして、「大人」になってからも、公的機関や民間企業等の職場でも障害者の割合は 2% 程度で推移しており、私たちは共に働く機会を奪われ、自らが暮らす地域においてもすれ違う程度の出会いに終始する傾向にある。」

この出逢いの不在という課題を乗り越えるために、中島氏は、1990 年代前半頃にアメリカのジーン＝レイヴとエティエンヌ＝ウェンガーによって提唱された状況的学習の理論を援用している。なお、状況的学習については、日本においても、『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』として日本語訳で書籍として紹介されている。状況

的学習は、レイヴとウェンガーの記す通り、単純明快な概念や定義で示し得るものではないが、その前提となっているのが、人間と組織がアイデンティティの変容・再構築を進めるためには、学校教育に代表される「正しい」知識の伝達・移転ではなく、「実践共同体」への参加を通してなされるという仮説である。中島氏は、この状況的学習を地元の地域住民に対して援用することを検討したのである。そのことが講演会の中の彼の次の発言となっている。

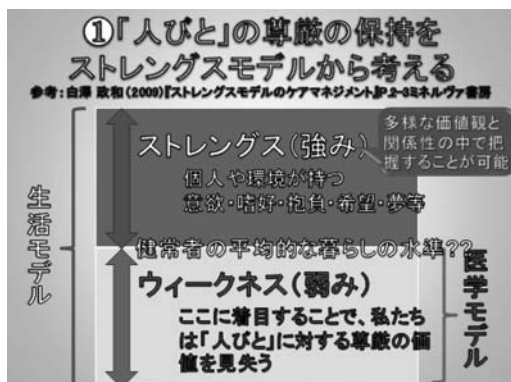
「社会変革とは人びとのアイデンティティの変容であると捉える。それは、顔と顔の見える関係の中で（地域《メゾ》領域の中で）、人びとの対話と関わりという状況を通して成されるものである。地域はその様な“豊潤な”場所であると捉える。

「人びと」の暮らしと存在、そしてその支援に携わる私たちの仕事を意図的に地域に「ひらく」ことが必要である。

「人びと」の暮らしの困難を、地域住民が共有し、身近に感じ、延いては、自らの事として考える状況的学習を促進する。」

3) 「出逢い直し」の基盤となる方法

それでは、地域において「出逢い直し」をいかにして実践するのか？中島氏は、その実践の基本的な視座として、下図のようにソーシャルワーク実践の基本的なモデルの一つであるストレングスモデルから導き出している。



中島氏によると、ストレングスモデルには2つの視点があるとする。まず、最初の視点は、実践家が「人びと」のウィークネスに焦点化した着眼

をすることによって、無意識の内に「人びと」を何もできない人であると認識するようになる。それと同時に、支援を受ける「人びと」自身も、自分は誰かの支援が無ければ何もできない存在だと自認してしまう“効果”が生じる。ストレングスモデルは、人間の尊厳の保持に繋がる。

次の視点は、カンザス大学の調査によれば、ウィークネスに着目したアセスメントに基づくケアプランには多様性が見られないとの報告がある。「出来ない事」の定義は、恐らく定型化がしやすい。つまり、ウィークネスには個性が表れにくい。ストレングスに着眼するという事は、「人びと」の個性を尊重することにも繋がるのです。すなわち、人間の多様性の尊重へと繋がっている。

これらの2つの視点をもって、地域包括ケアの実践を行っているのである。具体的には、認知症の高齢者に対する支援としては、まず、地域の「人びと」の不安と不満の低減に向けた支援を行うことがあげられる。そのためには、まず、認知症高齢者自身に対して援助初期の段階で24時間体制の短期集中的な支援を展開する。また、包括的な対応時間の設定のみならず、個性の高い支援を、本人の思いとそれを実行したい時期に即時行う。そのことにより、認知症高齢者の症状が落ち着き、認知症高齢者自身のBPSDの減少に繋がる。また、その過程で地域の「人びと」と職員との信頼関係が生まれる。このように、本人が他者と向き合える状況を担保した上で、家族・地域住民との「出逢い直し」を促すことへとつながるのである。

このような実践をそれぞれの状況に応じて行い、地域の絆という拠点は、様々な問題を抱えるサービスを必要とする利用者と、何も知らない地域住民との間における「出逢い直し」を促進し、両者のつなぐ役を果たしているのである。

4) ソーシャルワークの役割

最後に、中島氏は、このような働きにおけるソーシャルワーカーの役割について言及された。ソーシャルワークのグローバル定義をみると、「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進

する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。」とされている。この定義を受けて、中島氏は、ソーシャルワークは、社会正義と権利擁護を価値基盤とし、次の5つの仕事を通して、全ての人間の尊厳が保障された社会環境を創出する専門性の総体をいう、としている

- ①暮らしに困難のある人びとに直接支援を行うこと、
 - ②人びとが暮らしやすい地域社会環境を構築するよう社会的活動（ソーシャルアクション）を行うこと、
 - ③人びとのニーズを中心に、人びとと地域社会環境との関係を調整すること、
 - ④政策（政府・行政）に対し、人びとのニーズを代弁した社会的活動（ソーシャルアクション）を行うこと、
 - ⑤人びとのニーズを中心に、地域社会環境と、政策（政府・行政）における構造との関係を調整すること。
- 中島氏は、その上で、「状況的学習によって、

人びとと地域におけるアイデンティティの変容を促進していく実践が私たちの実践の中核をなす。しかし、私たちの実践は、地域変革で留まらない。なぜならば、直接接点を有する様々な人びととの状況的学習を通し、同じ地域に暮らす多様な他者への理解と慮りを成し得た人びとは、疑似体験や想像を経て今度は直接接点を有さない他者への慮りを始めることができると考えるからだ（例えば、福島や沖縄、そして次世代における問題など）。この様な地域変革の在り方は、社会変革に繋がる可能性があると考えている。」と述べ、「出逢い直し」により、人びとと地域におけるアイデンティティの変容を促進していくことは、まさしくソーシャルワークそのものであると結論づけているのである

3. 最後に

中島氏の実践をベースにしたメゾ・マクロソーシャルワークに関する講演は、非常に意義深いものであった。特に、メゾ・マクロソーシャルワーク実践の理論的な枠組みが不十分な中で、地域での実践経験とそれを様々な理論と結びつけることにより、日本独自のメゾ・マクロソーシャルワークの方向性を示唆している点は、良かったと思われる。

（石川久展）